

## 友子取立免状

拙宅があるのは、昔、摂津といわれた地域。兵庫県南東部と大阪府北部にまたがる地域です。そこに、多田銀山がありました。豊臣秀吉が開発を進め、1600年代には幕府直轄となり多くの銀を産出します。最盛期には3,000世帯、10,000人が暮らしたそうです。昭和46年（1971年）まで採掘が行われていました。

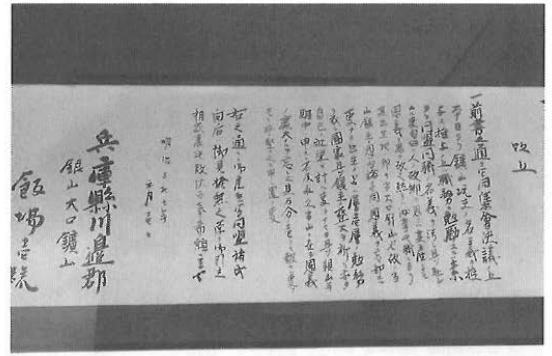
鉱山の閉山前後から、周辺の山を大手のディベロッパーが開発しました。ゴルフ場もいくつもあります。大規模な開発地の間の谷は開発から取り残され、ひっそりと昔のままの姿を残しています。そのひとつが銀山地区です。20世帯ほどの集落です。

銀山の代官所の跡に「悠久の館」という施設が作られています。館では銀山関係の資料を見ることができます。そのなかに「友子取立免状」がありました。

友子は、熟練採鉱夫の「同職組合？」です。江戸時代に成立したといわれています。明治時代に炭鉱や鉱山で発展しました。昭和になると近代的な労務管理が始まり、友子制度は衰退します。

友子制度は、主として2つの機能を担ったといわれます。ひとつは技能養成です。鉱夫は一定の徒弟修業をした後に、友子に取り立てられます。そのとき、「親分ー子分の杯」を固める儀式が行われます。その後、3年3カ月10日の期間、親分のもとで修業。鉱脈の

中嶋哲夫の「人事も歩けば」



▲友子取立免状（多田銀銅山 悠久の館所蔵）

見つけ方や鑿の保全などの技術を身につけます。2つめは相互扶助。独身者が多く事故や病気も多かった鉱山労働者です。親分の墓の建立は、子分の重要な仕事でした。見舞金、香典、奉願帳等の制度も運営されます。奉願帳は、「病気や怪我をした鉱夫が、各地の友子を訪ねれば、一宿一飯の世話を受けられる」というものです。

友子の運営は、自治的に行われていました。「当番」や最高責任者の「箱元」は輪番。ただし、事務所は飯場に置かれ、飯場制度とは持ちつ持たれつの関係だったようです。その当時、企業が管理するのは飯場の親方まで。飯場の運営は自治的な組織に預ける、そんな組織統治の姿が浮かび上がります。

最後に PR。拙著『奇跡の企業組合 生業の里』（博進堂）を上梓しました。還暦を超えたお母さんたちが、スーパー限界集落で運営してきた企業組合の記録です。

（MBO実践支援センター代表）